

心理学における創造性と土着性

野田俊作（大阪）

要旨

キーワード：

1. 創造的思想と土着思想

文化への治療としての創造的思想

エーリッヒ・フロムは、「創造的思想は常に批判的思想である」^{〔1〕}と書いています。いったい何に対して批判的であるかということ、社会が共有している自明性に対してであると、私は思います。「共有された自明性」は、通常『文化』と呼ばれています。それは、多くの場合無意識的であって、言語化されることがなく、したがって反省してみられることがありません。それを意識化し言語化して、理性にもとづいて批判を加えるのが、創造的思想の役割です。創造的思想とは文化批判なのです。

文化は個人のライフスタイルに相当するものですから、そこには、良いものも含まれているでしょうが、問題のあるものも含まれているはずで、それを批判的に再検討して、問題点を明らかにし、代替案を用意することは、個人の心理療法に相当する作業です。創造的思想は、文化に対する治療的アプローチなのです。これがなければ、人類の精神的な進歩はありえません。

創造的な思想は、たとえば地位や財産についての成功のような、世俗的に容認され、さらには偶像化されてきた価値を批判して、代わりに、より人間的な価値を発見しようとし、その結果、必然的にスピリチュアルなタスク、すなわち、「私は誰であるか」「生の意味は何であるか」にかかわることになり、真に人間的な生き方は何であるかを問題にする思想になります。アドラー心理学もまた、世俗的な偶像化された価値を批判しつつ「人生の意味」を問い続ける、批判的で創造的な、本質的にはスピリチュアルな思想であると、私は思っています。

文化批判への治療抵抗としての土着思想

創造的思想が文化の価値観を批判するとき、それへの反動として、文化が本来持っていた価値観を擁護するための思想が形成されてきます。これを土着思想と呼ぶことにします。土着思想は、批判の拒否ですから、「考えることをやめて、現状をそのまま受容せよ」と主張します。これが土着思想の基本的メッセージです。

土着思想の例として、たとえば、神道の思想をあげることができるでしょう。古代日本の文化的自明性が言語化されたものが神道ですが、これは仏教という外来の思想に触れてはじめて思想化されました。仏教が批判的創造的な役割を果たした時代があったのです。神道は、日本古来の価値観を反映していると思われませんが、歴史的に見れば、仏教への反動としてはじめて言語化さ

れたものです。こうして言語化された神道の思想とは、おおむね次のようなものです。

世の中に生きとし生ける物、鳥虫に至るまでも、己が身のほどほどに、必ずあるべきかぎりのわざは、^{むすびのかみ}産業日神のみたまに頼りておのづからよく知りてなすものなる中にも、人は殊にすぐれたる物として生まれつれば、また、しか勝れたるほどにかなひて、知るべきかぎりは知り、すべきかぎりはする物なるに、いかでかその上をなほ強ひることのあらむ。教へによらずては、え知らずえせぬものといはば、人は鳥虫に劣れりとやせむ。いはゆる仁義礼讓孝悌忠信のたぐひ、皆人の必ずあるべきわざなれば、あるべきかぎりは、教へを借らざれども、おのづからによく知りてなすことになるに...^[2]。

これは江戸時代の神道思想家本居宣長の『直毘靈』^{なほびのたま}の一節ですが、ここには、「考えることをやめて、現状をそのまま受容せよ」という土着思想の特徴が端的に言いあらわされています。

しかし、ただそう言ったのではいかにも説得力に欠けるので、土着思想は、この主張の正当性の根拠として、根元的な秩序形成力（ここでは産巢日神）を持ち出します。そして、それと人間の意志的な努力との葛藤という図式を描き、人間の不幸の原因をこの両者の対立に帰しておいてから、秩序形成力を十全に働かせるためには、人は意識的な努力を放棄しなければならないという結論を導き出すのです。すなわち、

1. 根本的な秩序形成力が存在する。
2. 意識的努力は秩序形成力と対立し、混乱を引き起こす。
3. したがって、意識的努力を放棄すれば、おのずと秩序があらわれる。

というように論理を構成します。

このようにまとめると、これは日本独特の思想ではまったくなくて、世界中にある思想であることがわかります。たとえば、中国にもこういう思想はありました。

虚無の道を極めて静寂の境地に入ると、この世におこるさまざまのことは、結局は究極の実在である道タオのあらわれであるとわかる。事物は変動するが、その元に根本がある。その根本に帰ることを静寂といい、静に帰ることを天命に復帰するという^[3]。

聖人の教えなど捨てれば、民の利益は百倍になる。道徳など捨てれば、民は親を敬い子を慈しむ。名誉欲や物欲を捨てれば、盗賊はいなくなるであろう^[4]。

これは『老子』からの引用です。老子の思想は、当時の文化への批判であった孔子の思想への、文化の側からの反動であると考えられます。ここでも批判的思想が先行し、それへの反動として文化的自明性が土着思想として言語化されているのです。また、ここでも、根元的秩序形成力（ここでは道タオ）の存在と自己放棄の必要性を根拠にして、楽天的な現状肯定が主張されています。

ここには、盲目的な現状肯定があるだけで、批判精神も創造的発想もありません。それはそれで、土着思想は、文化への治療である批判的思想に対する、文化の側からの治療抵抗であり、伝統的慣習の自己弁護、自己保存努力であるにすぎないのですから。

創造的思想の土着化

批判的な創造的思想も、継承されるうちに批判性を欠くと、容易に土着思想に呑み込まれてしまいます。思想の歴史は、批判的創造的思想があらわれては、やがて土着思想に呑み込まれ、それに対する批判としてまた新しい批判的思想があらわれる、ということの繰り返しであったといってもよいでしょう。

ある時代の日本と中国においては、仏教が批判的思想であり、神道や道教が土着思想でありましたが、仏教はやがて土着思想に呑み込まれてゆきました。たとえば、日本中世天台宗の論書である、伝源信『真如観』は、

今日より後は、わが心こそ真如なりと知り、悪業煩惱も障りならず、名聞利養かへりて仏果菩提の資糧となりつれば、ただ破戒無慙なり懈怠懶惰なりとも、常に真如を観じて忘ることなくば、悪業煩惱、往生極楽の障りと思ふことなかれ^[5]。

と述べていますが、これは仏教用語で書かれた土着思想です。ここでは、仏教は神道に呑み込まれているのです。

中国では、たとえば、唐代の禅僧臨済が、

諸君、ブツダの教えは工夫を用いることがない。ただ、平常無事で、排泄したり、着替えをしたり、飯を食ったり、疲れれば寝たりするだけのことだ、愚か者はこういう私を見て笑う。しかし智者ならばわかる。昔の人も言っている。「外に向って工夫するなどというのは、大バカ者だ」とな。君たちが、どこにいても自己自身でおれば、することなすことみな真だ。外から何がやってきても、君たちを引き回すことはできない。これまでの無限の生涯に蓄積した悪いカルマがあっても、そのまま自然に解脱の世界に生きることができるのだ^[6]。

と言っています。これも仏教用語を用いてはいますが、まったく道教的であり、土着思想に呑み込まれた仏教なのです。

ちなみに、このようにして、元来は批判的思想であった仏教が土着思想に呑み込まれてしまった結果、われわれが日常なんとなく『日本的』なり『東洋的』であると感じているものは、神道であれ仏教であれ、今やすべて土着思想なのです。これらが安易な現状肯定でしかないことを見落としてはなりません。そこには創造的変革的な力は微塵もないのです。

2. 初期深層心理学の創造性と土着性

フロイト・アドラー・ユングの位置

ここで、批判的創造的思想と土着思想の対立という見地から、心理学の歴史を振り返ってみましょう。

まずフロイトが十九世紀ヨーロッパの文化的自明性のいくつかを批判しました。彼がもっとも激しく批判した文化的自明性は、ヴィクトリア朝風の偽善的倫理です。それは、たとえば次のようなことでした。

フロイト以前の時代には、わが子を罰するのはその子の発達を助けるためであると信じている人があれば、それをほんとうに信じているかぎり、彼はまったく正直な人間だと言えただろう。

フロイト以後は、彼の信念が自らのサディスティックな願望の単なる合理化にすぎないのではないか——すなわち彼は子どもをなぐることに快感を感じていて、その単なる口実としてそれが子供のためなのだと考えているのではないか——が決定的な問いとなった。(中略)フロイト以後は、「私は善意でやったのだ」という言葉は、口実としての機能を失ってしまった^[7]。

彼の方法は、倫理の諸概念を世俗的な動機でもって説明することによって、その価値の先験性を否定することでした。たとえば、神とか愛とかいった、当時の文化の価値観を、フロイトは生物学的な用語あるいは病理学的な用語でもって説明し、それらの名声を徹底的に下落させました。たとえば次のようにです。

宗教は人類全体がかかっている強迫神経症であり、幼児の強迫神経症と同じく、その原因はエディプス・コンプレックス、つまり父親との関係にあると言ってよい^[8]。

こうして、彼は世俗的な価値も宗教的な価値もひっくり返して、生物学的な本能論に還元してしまうのです。彼はたしかに偶像破壊者でした。倫理という偶像を破壊したという点で、彼の思想はすぐれて批判的であり、彼自身はスピリチュアルな発想法についてまったく拒否的な世俗的人間であったにもかかわらず、思想は結果としてスピリチュアルなものになりました。

ここまではよかったです。彼は先験的善としての根元的力を否定して、代わりに先験的悪としての根元的力を仮定してしまったのです。彼は神の偶像を破壊して、代わりに悪魔支配の世界を描き出してしまいました。

そもそもの初めから人間の心に巣喰っているこの人間相互の敵意のために、文化社会は不断に崩壊の危機に曝されている。本能的情熱は理性的打算よりも強力だから、労働共同体の利害などを持ち出しても、文化社会を繋ぎとめておくことはできないだろう^[9]。

もっとも、フロイトは、根源的悪としての生物学的本能がすべてを決定してしまうと主張したわけでもないようです。すなわち、彼は常に二元論者であり、「イドあるところにエゴあらしめよ」という標語によって、そのような破壊的な力に対抗できる理性的自我の可能性を強調したのです。

しかし、フロイトは、一方では意識的自己を批判しています。フロムは、次のように書いています。

この〔フロイトの〕思想がラディカルであったのは、自らの全能と全知に対する人間の信念の最後のとりで、すなわち人間経験の究極的データとしての意識的思考に対する信念を、それが攻撃したからである。(中略)彼は根源——これが<ラディカル>の文字どおりの意味である——にまでさかのぼり、私たちの意識的思考の非常に多くの部分が、真の思考や感情をおおい、真実を隠すものであるにすぎないこと、意識的思考のほとんどは見せかけであり、私たちが意識したくない思考や欲求の合理化にすぎないことを、発見した^[10]。

このように、一方で意識的思考を徹底的に疑いながら、一方で意識的思考によって文明を批判しようとするのは、まったくの自己矛盾です。この点で、フロイトの思想ははじめから破綻していたと言わざるをえません。

アドラーはフロイトの批判をより徹底させました。アドラーが批判したのは、競合的で自己中

心的な人生哲学であって、合理精神ではありませんでした。彼は、合目的性が人間精神の運動法則であると考えて、意識的精神も無意識的精神も共に、合目的性という意味で合理的であると考えました。したがって、彼の思想が合理主義的であることは、何らの矛盾を招来せず、批判は全体として整合的なものになっています。

ユングの位置は、フロイトとアドラーの批判的思想に対する、当時の文化的自明性の側からの反動として理解することができます。ユングの思想は、いかなる批判性をも欠いた、徹底的に土着的なものです。精神医学史家アンリ・エレンベルガーは次のように書いています。

精神分析学は、実証主義、科学主義、ダーウィン主義の相続人であるのに反して、分析心理学はこういった遺産の相続は拒否し、ロマン派精神医学と自然哲学という源泉そのものに何の改変も加えることなく、そこへそのまま還帰する^[11]。

ユングが回帰したのは、ヨーロッパの古い土着思想である新プラトン主義であり、それを承けた中世の神秘主義でした。それは、ユング自身がその共通性を指摘しているように、中国や日本の土着思想と同じ、根元的秩序形成力の存在と、それを実現するための自己放棄とを主張する思想でした。すなわち、ユングは、意識の中心である『自我』に対して、意識と無意識とを含んだ心の全体性の中心である『自己』を想定しました。この『自己』は、土着思想の特徴である根元的秩序形成力の条件を完全に満たしています。

『真の自己』の概念

ちなみに、このような『自己』は、ユング心理学に特有なものではなく、土着思想全般に広く見られる概念です。たとえば、臨済は、

すべてのものは空であって、外界には真実のものは何ひとつないのであるが、ただ私の説法を聞いている諸君の中に、それ以上は根拠を遡れない真の自己があつて、これがブツダたちの母なのだ。すなわち、ブツダは真の自己から生じるのだ。だから真の自己を悟ったら、それ以上ブツダのことなど考えなくていいのだ。これが正しい見解というものだ^[12]。

と言いますが、ここにも根元的秩序形成力としての『真の自己』の思想が見られます。

歴史的にみると、古い土着思想は、個人の外側に存在する『神』を秩序形成力として想定していましたが、次第にそれは時代遅れになり、やがて個人の内側にある神、すなわち『真の自己』を考えるようになったのです。土着思想もそれなりに進化するわけです。しかし、表面上の形は変わっても、根元的秩序形成力を想定し、それと意識的自己との対立を考え、結論として自己放棄を迫る、という基本的な構図は一貫しています。

現代の洗練された土着思想は、みなこの『真の自己』の概念に立脚しています。この概念があることが、土着思想の目印であるといつてよいほどです。外見的に、宗教であろうが哲学であろうが心理学であろうが、『真の自己』の概念を持っている思想は土着思想です。『真の自己』は、土着思想の神なのです。

そうすると、ユング心理学は、紛れもない土着思想であることがわかります。フロイト心理学は、少なくともフロイト自身においては『真の自己』の概念を持っていませんでしたので、この点でも反土着的な批判的思想であったといえます。

3. 治療論からみた創造的思想と土着思想

土着思想的治療論

禅やユング心理学のような洗練された土着思想において『真の自己』と呼ばれているものは、われわれが意識的に感じている自己とは別のものであるとされています。日常的に感じられる自己は『仮の自己』であるとされるのです。

また、『真の自己』は、先天的に備わったもので、『仮の自己』は、生後身につけたものだと言えます。なぜなら、『真の自己』は、精神現象の根本原因であると考えられていますので、それはすべての現象の原因であって、しかも何の結果でもないと考えられ、それゆえ、後天的に環境等を原因として形成された結果ではありえず、先天的に完成した形で備わっているものでなければならぬからです。

『真の自己』が先天的に完成した形で備わっているものであるとすれば、なぜそれはわれわれの日常にはたらきをあらわさないのでしょうか。それは『仮の自己』に被われているからであるとされます。ちょうど宝石が鉱山に埋まっているように、あるいは鏡に塵がこびりついて光を写さなくなっているように。土着思想化したインド仏教の論書『宝性論』は、

仏の本性 (buddhatva) は本来明るく輝いているが、客塵の煩惱と所知の厚い雲の網に普く障えざられて見えないこと、太陽、空のごとくである。^[13]。

と言っています。ユング心理学的に置き換えると、『仏の本性』が『自己』に、『客塵の煩惱と所知』が『自我』に相当することになるでしょう。

そこで、修業あるいは治療によって、『仮の自己』の殻を破って、『真の自己』を開放してやる必要が出てきます。このような開放を、インドでは『解脱 mokṣa』と呼びました。つまり、土着思想とは解脱思想なのです。

河合隼雄は、

自己実現は落ちていた大金を拾って使うような甘い話ではない。隠されていた宝を求めて多くの苦勞を重ねる話は昔からよくあるが、このような苦しみは自己実現には必ず伴うものである^[14]。

と言っています。この「隠された宝としての真の自己」という考え方はまったく土着思想的です。こうして「発見」される『真の自己』は、先天的なもの、「生まれる前の顔」「ありのまま」「自然」に帰ることですから、土着思想における治療論は必然的に退行主義なものになります。

また、治療は、知的なものであってはなりません。なぜなら、知は言語的なものであり、言語は後天的に習得されるものですから、定義上、『仮の自己』に属するのです。したがって、知的なものを付け加えると、『仮の自己』の殻を厚くするばかりで、かえって逆効果であると考えられることになります。つまり、土着思想は、反言語的であり反理性的であり、したがって神秘主義的なのです。

臨済は、

諸君は、言語にとらわれて、迷いとか悟りとかいう名前にこだわっているために、道を見る眼を遮られて、はっきりと見るができないのだ。経典といえども、書いてあることはすべて表面的な言説にすぎない。諸君はそのことがわかっていないので、表面的な言葉の詮索をしてわか

ったと思ひこんでいる。しかし、それは言葉に依りかかっているだけで、なんのことはない迷いの真っ只中なのだ。君たちがもし生死を離れて自由になりたいなら、この話を聞いているその君が、形相もなく、それ以上遡るべき根本もなく、それ自体以外に依るべき場所もなく、しかもピチピチと躍動している真の自己なのだという、そのことをたったいま知るのだ^[15]。

と言っています。ここには、土着思想の解脱主義、退行主義、反言語主義、反理性主義、神秘主義が出そろっています。

ユングは、実際にこれに近い治療論を展開しました。ユング派の主たる話題は、理性的でない現象である夢であり、これについてユングは、「分析家は何をしてもいいが、夢を理解しようだけではしてはならない」^[16]と言っているといひます。すなわち、夢を話題にはするが、それを知的に分析するのではないのです。そうではなくて、「患者と治療者の共通の場としての無意識の中に形成されてくる元型的な布置の作用を両者共に経験」^[17]するために、「治療者は転移を退いて解釈するのではなく、そのなかに生きる」^[18]のであり、具体的には、「患者の夢に従って、それらと関係深い主題を持つ神話を読み、童話を探しだし、ときに音楽会に行ったり、絵画をみたり、自ら描いてみたり、患者とその内的世界を共にする努力を払うのである」といひます^[19]。このような手続きは、河合が指摘するように「自己の存在を強調し、その自己治癒の力に信頼をおく点は、ユングと東洋的な方法との親近性の高いところ」^[20]ではありますが、ただしユングが近いのは東洋の土着思想であって、決して批判的な創造的な東洋思想ではないのです。

フロイト派の治療論の墮落

フロイトの理論は、無意識の中に存在する内容は善ではなくて悪であると考えるので、解脱思想を形成することができません。自己否定の彼方には、「人は人に対して狼である」世界が待っているだけだからです。そこで、「フロイトの治療目標は、自我の強化による本能的動因の制御である」^[21]ということになります。すなわち、フロイトの治療論は、意識的自己の放棄ではなくて、その強化の方に向かっていたのです。

しかし、このようなフロイトの批判精神は、弟子たちに正しく継承されませんでした。このことについて、フロムは次のように書いています。

精神分析が飼いならされて、ラディカルな理論から自由主義的な順応の理論に変貌することは、ほとんど避けがたいことであつた。それは、医者だけでなく患者も、ブルジョア的中流階級の出身であつたからである。ほとんどの患者が望んでいたことは、より人間的に、より自由に、より自主的になること——それはより批判的で革命的な精神を持つことを意味しただろうが——ではなく、彼らの階級に属する普通の人びと以上の苦しみを持たないことであつた。彼らは自由な人間になることではなく、成功したブルジョアになることを望み、＜持つこと＞の優位から＜あること＞の優位への変化が要求する、ラディカルな代価を支払うことを、望まなかつた。それも当然であつた。彼らはほんとうに幸福な人物は一人も見なかつたし、わずかな人びとが、それも成功して他人から賛美されるような人びとが、自分の境遇に相対的な満足感を得ているのを見るだけであつた^[22]。

フロイトは、先験的な善を認めなかつたという点では批判的でしたが、それでは何が真の善であるのかを定義しませんでした。そのとき、世俗的な善、たとえば地位や財産や名誉を得ることが、容易に治療の目標となってしまいます。この点で、たしかにフロムの言うように、彼の思想は中産階級文化の世俗的な自明性をそっくりそのまま許容している部分があり、その結果、批判

精神を欠いた弟子たちの時代になると、思想の全体は安易に土着化して、安易な人生哲学に没落してしまっただけです。

その結果、フロイトの理論が持っていた批判的理性への信頼は忘れられ、患者の発話の言語による解釈ではなく、患者からのいかなる依存や攻撃をも受容する『かかえる holding』というような非理性的方法でもって、退行的な状況下で、患者が自分の内なる『よい対象 good object』と接触できるように援助するというような、まったく土着思想的な理論にすりかえられていったのです。

たとえば、対象関係論者ガントリップは、次のように書いています。

神経症は内的な悪い対象に対するさまざまな防衛の試みに由来し、患者がそれを放棄できるのは、分析者が彼にとって十分に良い対象となった時である。…分析者が、患者が内的な悪い対象を彼の上に投影することすべてに対して、しっかりと耐え抜く能力があることを見せ、そのことでもって歪曲されていない現実的な関係に患者を導きいれるとき、患者は自分の真の自己を見つけたのである^[23]。

このように、現代フロイト派の治療理論は、やはり『真の自己』を想定する、一種の解脱思想になってしまっています。

アドラーの治療論

アドラー心理学において、もし『真の自己』に相当するものを探そうとするならば、ひとつの候補は『ライフスタイル』です。しかし、これは、土着思想的な意味での『真の自己』ではありえません。なぜなら、ライフスタイルは、先天的に与えられたものではなく、学習によって形成されるものであり、しかも結局のところ『私的論理』にすぎず、かならず誤りを含んでいると定義されているからです。

『真の自己』に相当しそうなもうひとつの概念は『共同体感覚』です。私がこの概念を常にうさん臭く感じてしまうのは、アドラーがこれを「先天的可能性」だなどと言うからです。これは『真の自己』を思わせる言い方です。たとえ彼が「それは意識的に育成されなければならない」と付け加えても、なお私にはうさん臭く思えるのです。それは、たとえば「歩く能力」とか「喋る能力」と同じ意味でしか、先天的可能性ではないと思います。つまり、「人と交わる能力」でしかないと思うのです。それなら、わざわざ先天的可能性などと言わなくていいのではないかと。なぜなら、先天的に不可能なことを、人間がするわけではないのですから。

もし、ライフスタイル分析によって意識的な自己を否定してゆくことで、やがて『真の自己』である共同体感覚があらわれ出るといような理解をしている人がいるとすると、その人は土着思想の図式に従っていることになり、もっとも反アドラー心理学的な思想を持っていることになります。そのような共同体感覚は、アドラーが言った共同体感覚とはまったく別の、土着思想の神でしかありません。共同体感覚というのは、『仮の自己』であるライフスタイルに覆われて隠れていて、掘り出されるのを待っている完成品ではありません。それは、せいぜいのところ、ライフスタイルのある種の様態をいう用語であるにすぎず、存在ではなくて過程、『もの』ではなくて『こと』なのです。

『真の自己』を想定しないアドラー心理学の治療理論には、ある意味で到達点がありません。自分のライフスタイルを批判することを通じてより自覚的、主体的であることが強調されるだけなのです。ライフスタイルを変化させることさえ、実は問題になっていないかもしれません。アドラーは、当時の心理学の文化的自明性に従って、性格改善というものを信じていたようですが、

私はあまり信じません。性格が個人を動かすのではなくて、個人が性格を使用するのですから、個人が自覚的であれば、性格は個人を支配できないからです。もっとも、そのような自覚的生活を通じて、ライフスタイルが結果的に変化することはありうるでしょうが。

4. いくつかの関連する問題

無責任の奨励としての土着思想

土着思想が「根元的秩序形成力の存在を認める思想」であるとする、創造的思想とは、「根元的秩序形成力の存在をいっさい認めない思想」でなければなりません。土着思想は、真の意味での因果性の概念を欠いています。なぜなら、すべての事象は、結局のところ根元的力の結果であるにすぎず、「根元的力が私を動かす」のであって、私におこる事象間には因果連鎖がないからです。一方、批判的思想では、事象間の因果性だけが認められ、根元的な原因は認められません。

アドラーの劣等感や目標追求性やライフスタイルや共同体感覚の概念は、いかなる意味でも根元的力ではありません。それは、精神現象の主語ではないからです。「劣等感が」人間を動かすわけではありません。つまり、劣等感や目標は始動因としての『原因』ではないのです。たとえば、英語が下手だという劣等感を持つ人は、英語を勉強しようと思うかもしれません。このように、劣等感は行動に形を与えようとします。形の与え方をライフスタイルというので、ライフスタイルは形相因ではあるのです。しかし、アドラーのモデルによれば、その形を受け取るかどうかについては、人間は自由意志を持っているのです。ライフスタイルは行動の最終的な決定因ではありません。行動を決断し実行する主体はライフスタイルではないのです。だから、劣等感等は『力』ではありますが『根元的力』ではありません。

では、『主体の決断』が根元的力かということ、そうでもないのです。もし決断が根元的力であるならば、すべての教育も治療も倫理も否定されてしまいます。なぜなら、何ものもそれに影響を与えることはできないから。なにしろそれは『根元的』な力なのですから、他の力によって影響をうけることがないのです。それでは、コミュニケーションは不可能になってしまいます。

では、何が根元的力なのか。それを話題にしないのが創造的思想なのです。創造的思想においても因果性は普通否定されません。原因と結果の連鎖は承認されるのです。しかし、他のいかなるものの結果でもない根元的原因というものの存在は否定されます。そういう根元的原因を想定するのが土着思想だからです。アドラー心理学は根元的力を知りません。

創造的思想とは、結局のところ、自分の行動について、『私』を主語にする思想です。その『私』は、この私の全体であって、意識だけでなく無意識だけでもなく、そのすべてです。自分の行動を決定するものは、全体である『私』以外にはいないのです。ですから、創造的思想とは、自分の行動の責任をすべて自分で引き受けようとする思想なのです。

逆に、土着思想とは「私でないXが」と、自分でないものを自分の行動の主語に置く思想です。このとき「私を」と、人間は述語に置かれてしまいます。土着思想の問題点は、行動の主題である個人の他に真の行動の原動力を想定することです。それが外に存在する『神』であろうと、内に存在する『真の自己』であろうと、それは個人とは別の存在であり、個人の行動の責任は、個人にではなく、そのものに帰せられるのです。つまり、無責任を認める思想です。だからこそ、それは大衆に受け入れられやすいのですが。

自己嫌悪としての自己表現と真の自己受容

土着思想の言う『仮の自己』の放棄と『真の自己』の実現」という公式は、いかにも「あるがまま」の自分を受け入れる自己受容であるかのように見えます。しかし、そうではないのです。なぜなら、受け入れられるはずの『真の自己』など、誰も知らないからです。一方で、知っている自分は『仮の自己』であり、これは嫌悪され放棄されるべき対象とされます。つまり、土着思想とは、自己嫌悪の思想なのです。

一方、創造的思想は、自己受容の思想です。自分のライフスタイルを批判することは、自分を嫌悪することではありません。それは、自分の中にある文化の誤った影響を批判することだからです。自分を受容できないのは、文化が押しつけた価値観でもって自分を値踏みするからです。創造的思想は、その価値観を批判することで、自己嫌悪を脱却して自己受容に至るのを援助します。文化を批判することは、自分を受容することと同じことなのです。いつかあらわれてくるであろう『真の自己』を空しく待ち続けるのではなく、文化が与えた迷信を脱却して、この自分を正しく受容すること。そこからすべてが始まります。

ファシズムの基礎理論としての土着思想

たとえば、最初に引いた神道思想と同じことを、次のように書くとどうでしょうか。

民人天稟の本性には、何の修飾もなく何の文彩もない。その本性の機能は、人事百般の是非善悪利益得失すべての問題を解決すべき、規矩準繩の真源であり根底である^[24]。

これは戦前の右翼的アナキストであった権藤成卿の『自治民政理』という本の書き出しです。ここでも、「本性の機能」と呼ばれる、内的ポテンシャルが想定され、それが一切の秩序の根元であると想定されています。ここから、この思想は次のように展開してゆきます。

人は決して単独孤生のものではない。その呱呱の声を揚ぐるや、すでに父と母と我との三人があり、兄弟もあり、隣人もあり、郷党もあり、国人もある。人は地に落つれば、必ず非我との関係を生ずるのである。人には「生きる」の必要があり、また最も幸福に生きんと欲する欲求がある。しかして人にはまたその欲求を充すがために身外の万物をわが意のままに利用する能力がある。

いやしくもすでに自我と非我との関係がある以上、個人の自由は絶対無限のものではない。世のいわゆる権利責任なるものは、ここを発足点として創〔はじ〕まり、道徳といい、法律といい、郷団の規律といい、邦国の組織といい、みなここに萌芽を發して、自然に解沢生長したものである。しかもこれまた人の自然の性能たる「幸福に生きんとする欲求」を離れたものではない。(中略)

孟子のいわゆる惻隱の心、羞惡の心、辭讓の心、是非の心は、下等動物はいざ知らず、進歩したる現世界の人類においては、ほとんど先天的性能である。この性能を推し拮めたものが、他人のためにする公義というものである以上、公義は他より圧迫を受けて余儀なくせらるはずのものではない。少なくとも公に苦痛の觀念を伴うべきものでない。公義の觀念が最も崇高の極点に達したる場合、全く自己の私福を犠牲とするばかりでなく、生命といえどもあえて惜しまず、身を挺し節に殉じて悔いるところなく、かえってそれをもってみずから快しとしたものが、古来の史上その人に乏しくないのであれば人の幸福という意味は、自己一人の利益に飽くということとは、おのずから甄別のあるものである^[25]。

こうして道徳・法律国家などの文化装置としての社会制度を「人の自然の性能」に由来するものとして無批判に是認し、公德心とか慈悲心とか自己犠牲というかたちでの自己放棄を、オーダーメイドの解答として打ち出すのです。すなわち、性善説的な人間の基本的同一性から出発して、ついには自己犠牲を強要する「下からのファシズム国家」を説くに至るのです。

アドラー心理学が最悪の形に誤解されると、このような思想に墮落します。土着思想は容易にファシズムの思想になります。それは、個人の人間性の解放を目的にする批判的思想に対する反動だからです。私がこの小論を書いたのは結局のところファシズムに陥って、人間を疎外するしかない土着思想から、アドラー心理学を明確に区別するためです。

5. おわりに

この論文は、横浜市における第9回日本アドラー心理学会総会において口頭発表したものに手を加えたものです。まだ十分に練れていない主題を扱っていますので、不備な点が多々ありますが、最近考えていることの中間報告という感じで誌上発表させていただくことにしました。またこれは、以前に発表した「アドラー心理学の東洋的展開(1)個人が存在様式をめぐって」^[26]という論文における、土着思想的偏向を修正しようと意図したものでもあります。その論文は、根本的な誤りを数多く含んでいますので、いつか全面的に書き改めなければならないと思っていますが、まだ準備が整っていないように思いますので、その意味でもこれは中間報告という感じの論文ということができます。

[1] フロム・E., 佐野哲郎訳『フロイトを超えて』(紀伊国屋書店) 1980, p.15.

[2] 引用は、松本史郎『縁起と空』(大蔵出版) 1989, p.105 より。一部、漢字・かな使い・句読点を改めてある。

[3] 「致虚極、守静篤、萬物竝作、吾以觀其復。失物芸芸、各復歸其根。歸根日静。是謂復命」。阿部吉雄他『老子・莊子』(明治書院、新釈漢文大系7) 1966, p.37 より、引用者訳。

[4] 「絶聖棄智、民利百倍。絶仁棄義、民復孝慈。絶巧棄利、盜賊無有」。前掲書 [3]、P.42.

[5] 多田厚隆他編『天台本覚論』(岩波書店、日本思想体系9) 1973, p.125。一部、漢字・かな使い・句読点を改めてある。

[6] 「道流、仏法無用巧処。祇是平常無事、屎送尿、著衣喫飯、困来即臥。愚人笑我、智乃知焉。古人云、向外作巧夫、総是痴頑漢。■且随处作主、立処皆真。境来回換不得。縦有従来習氣、五無間業、自為解脱大海」。秋月龍民『臨濟録』(筑摩書房) 1972, pp.56-57 より、引用者訳。

[7] フロム前掲書 [1], p.43.

[8] フロイト, S., 高橋義孝他訳「ある幻想の未来」1927,『フロイト著作集』3 (人文書院) 1969, p.394.

[9] フロイト, S., 高橋義孝他訳「文化への不満」1927,『フロイト著作集』3 (人文書院) 1969, p.470.

[10] フロム前掲書 [1], pp.181-182.

[11] エレンベルガー, H., 木村敏・中井久夫監訳『無意識の発見』下 (弘文堂) 1980, p.289.

[12] 「... 尽見諸法空相、皆無実法。唯有聴法無依道人、是諸仏之母。所以仏従無依生。若悟無

依、仏亦無得。若如是見得者、是真正見解」。引用は前掲書〔13〕, pp.65-66.

〔13〕 高崎直道編『宝性論』（講談社）1989, p.142.

〔14〕 河合隼雄『ユング心理学入門』（培風館）1967.

〔15〕 「学人不了、為執名句、被他凡聖名礙、所以障其道眼、不得分明。祇如十二分教、皆是表顯之說。学者不会、便向表顯名句上生解。皆是依倚、落在因果、未免三界生死、若欲得生死去住、脱著自由、即今識取聽法底人、無形無相、無根無本、無住处、活撥撥地」。引用は前掲書〔13〕, p.66.

〔16〕 河合前掲書〔14〕, p.262.

〔17〕 河合前掲書〔14〕, p.258.

〔18〕 河合前掲書〔14〕, p.259.

〔19〕 河合前掲書〔14〕, p.259.

〔20〕 河合前掲書〔14〕, p.268.

〔21〕 フロム前掲書〔1〕, p.22.

〔22〕 フロム前掲書〔1〕, pp.184-185.

〔23〕 "The psychoneuroses arise out of a variety of attempted defenses against internal bad objects, which the patient can only discard when the analyst has become a sufficiently good object to him... The analyst must prove capable of reliably surviving all the patient's projections of internal bad objects on to him, thereby bringing the patient through to an undistorted realistic relationship in which he can find his own true self. "from Guntrip, H. : "Psychoanalytic Object-Relation Theory : The Fairbairn-Guntrip Approach" in Arieti S. ed. "American Handbook of Psychiatry, vol. 1", Basic Books, New York, 1974, p. 839.

〔24〕 権藤成卿「自治民政理」。橋川文三編『超国家主義』（筑摩書房、現代日本思想大系 31）1964, p.239.

〔25〕 前掲書〔24〕, p.243.

〔26〕 野田後作「アドラー心理学の東洋的展開（1）個人の存在様式をめぐって」『アドレリアン』2（1）,3-8, 1987.

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載